医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪

心を込めて患者さんと触れ合い、テーラーメードの糖尿病診療を

2013年9月取材

東京都大田区
しんクリニック 院長
辛 浩基 先生

辛浩基先生は、糖尿病が引き起こす腎症に関する研究で博士号を取得するなど、早くから糖尿病に関心を持っていました。しんクリニック開業後には内科や糖尿病内科に加え、糖尿病の合併症に対応するため眼科も併設し、充実した環境で患者さんを迎えています。先生が心掛ける“温もりのある診療”は、数多くの患者さんから支持され、「先生も体を大切に」と声をかけられるほど、両者に確かな信頼関係が築かれています。

個別の治療法で早期発見、合併症予防を

同クリニックは1997年の開業以来、1万人以上の糖尿病患者を受け入れていますが、まだ1人も失明した患者さんが出ていません。辛先生は、「血糖のコントロールがうまくいっている証拠ですので、自負していいかもしれませんね」と気さくな笑顔を見せてくれます。医学生のとき、教授から「糖尿病はこれからの病気」との助言もあり、以来、病院勤務医時代も含めて糖尿病治療を追求してきました。そして、食事や運動の見直しはもちろん、患者さんの仕事内容まで把握してインスリンのタイミングや薬物治療の方針を決める、いわばテーラーメードの医療を行うようになりました。結果、失明ゼロをはじめ、透析導入もわずかな数にとどまっているなど、高い合併症予防の実績につながっています。

待合室にはゆったりとしたソファが置かれ、患者さんはリラックスして診察を待つことができます。

温もりが感じられる診療を心掛ける

温もりが感じられる医療を心掛ける辛先生は、患者さんとの触れ合いを大切に、血圧を測る時も腕帯を自ら患者さんの腕に巻きます。

開業後、ほとんど休む暇なく診療に打ち込む中で、辛先生が大切にしてきたのは“温もりのある診療”です。血圧を測る腕帯を手で巻き、聴診器を当てる。紙カルテにペンで書きながら、話をして悩みを聞く――そうする内に、「開業3年目には患者さんに会った段階で、何を訴えたいのかが分かってきました」と言えるまでに、糖尿病専門医としての習熟度も高まっていきました。地元の蒲田や、都県境を挟んで隣接する神奈川県川崎市近辺から訪れる患者さんは、人情味にあふれる人たちが多いのか、休診をすると「どうして休んだの?」と心配する問い合わせがくるそうです。辛先生が患者さんからいかに慕われ、必要とされているかの証とも言えるでしょう。

より良い地域医療の次のステージを

「糖尿病に関する地域の病診連携には、大田区の代表として力を入れて取り組んでいます」と話す辛先生。現在、大田区、品川区を含む地域の医療関係者で構成する糖尿病連携検討会では、クリティカルパスの在り方や、紹介ルートの策定、特定健康診査を終えた患者さんの対応など、さまざまな角度から糖尿病治療を検討しており、辛先生もメンバーの一員として参加しています。また、在宅医療に関しては、辛先生は地元医師会と連携し、筋萎縮性側索硬化症(ALS)やパーキンソン病など難病患者のケース検討会を開催しているそうです。患者さんのために尽力を惜しまない辛先生は、より良い地域医療の次のステージを開いていくに違いありません。

診察室の中にあり、すぐに検査できる頸動脈エコー。頸動脈の動脈硬化を直接評価でき、将来的に脳梗塞になる可能性がないかを判断します。